

イスラムのスカーフを着用し、父親と共にイスラム教徒向け高校の入学式に臨む女子学生



# モスク内に私立高

## 「集団主義だ」極右政党反発

の風当たりも強い。  
チュニジア出身の父親  
と一緒に開校式に臨んだ

アナス・サグルニ君(15)  
は「良質な教育を受ける  
ためだが、イスラム教徒

としての自覚もある。こ  
の学校ならラマダン(イ  
スラム教の断食)や礼拝  
もやりやすい」と入学動  
機を説明する。

フランスでは公立学校  
にイスラムのスカーフを  
着用して登校する女子生  
徒の問題が1980年代  
末からくすぶっている。

フランスは公教育の非宗  
教性を貫き、人目を引く  
ような宗教的な服飾の着  
用は認めていない。

「リセ・アペロエス」  
ではスカーフ着用は女子  
生徒の意思にまかされて  
いるが、開校式に出席し  
た4人全員が着用。女子  
生徒の一人(16)は「公立  
中学校では着用できなか  
ったが、スカーフは私の  
人格にとって大切だ。こ

こに入学したのはスカ  
ーフをかぶれるからだ」と  
誇らしげに語る。  
高校はモスクの3階に  
ある。理事長を務めるア  
マル・ラスファル氏(42)  
はモスクの説教師で、モ  
スクとの一体性は否定で  
きない。

極右政党「国民戦線」  
は「開校を認めたのはイ  
スラム教徒としての」集  
団主義の跋扈とフランス  
の解体につながる」と批  
判している。

これに対し、ラスファ  
ル理事長は「イスラム文  
化に根ざしているが、宗  
教高校ではない。モスク  
と学校が共有しているの  
は建物の壁だけ。数年後  
には移転する予定だ」と  
反論している。

Mainichi (journal japonais).  
septembre 2003